



Roman Book

著者の了
解により
検印廃止

昭和39年7月10日 第1刷発行

あか つばき はな
赤い椿の花

¥ 250

著 者 た みや とら ひこ
田 宮 虎 彦

発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社

発 行 所 株式会社 講 談 社
東京都文京区音羽町3の19
振 替 東 京 3 9 3 0
電話東京(942)1111(大代表)

© 田宮虎彦 一九六〇

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

赤い椿の花

田宮虎彦



Roman Books

装
幀
仲
田
好
江

目次

菅多峠路線	7
港の祭り	21
女	36
ふるさと	73
ジェットコースター	102
椿の花	154
新しいトンネル	175
あとがき	221

赤
い
椿
の
花

菅多峠路線

1

遠くでハッパの音が聞えた。

それは、こだまをよんで、しばらく尾をひいて聞えていた。

S交通バス菅根淵^{すがねぶち}掘店の奥土間の上り^{がまち}框に腰をかけた、掘店の内儀^{うちぎ}さんがいれてくれた熱い番茶をすすっていた。窪津^{くぼつ}加久見^{かぐみ}は、その遠い音にふっと眼をあげた。覗きあげるように見上げた窪津の眼に、低い軒底^{のきびさし}にかぎられた十一月はじめの午後の澄みきった空と、日かげにな

った窪津は、その姿勢のままハッパ

「トンネルじゃ、またハッパをやっているな」

とつぶやくようにいった。

窪津は五十近い。でマライのペナン近くですごし

た五年間が中にはさ^めていたが、満十八歳で自動車の運転免許^{めんきょ}をとった日から今日までのほとんどを、けわし

い菅多峠のバスの運転手としてすごして来ていた。ほとんどというのは、一度、半年足らず他の路線にまわされていたことがあったからだ。しかし、窪津はすぐこの路線にもどされた。この路線に配属される運転手の指導と養成に窪津がどうしても必要であったからだ。

窪津は、まわりの人に何時^{いつ}も安心感をいだかせる人柄であった。窪津が姿を見せるだけで、落ちつきを失っていた人々が落ちつきをとりもどす。そんなことがしばしばあった。運転台でハンドルを握っている時はもちろんであったが、運転台をはなれている時でもそうであった。つよく張っている顎^{あご}、ものの裏側まで見ぬいているような眼、それでいて、あたたかい感じが窪津にはあった。

「ハッパ工事はもうすんでいい頃だと思っていたんだがなあ」

またつぶやくように窪津がいった。

「取合道路にまだ大きな岩が残っているんじゃないか」

かまどのそばから掘店の内儀さんがこたえた。内儀さんの甥^おっ子がトンネル工事の斎藤組で働いていた。岩が残っていることは、その甥っ子から聞いていたのだ。

菅多峠を標高百五十メートルあたりの中腹で北側から南側へぬけるトンネル工事は五年前の夏に、最初のハッ

パを導坑^{どうこう}にしかけた。導坑は菅根淵側から掘りはじめたから、ハッパの音は山肌^{やまはだ}の椎^{しい}や櫓^{うし}の小枝をふるわせて聞えて来た。その頃には、山北市や佐土浜市から見物人がバスに乗って、その工事を見に来たものであった。

窪津は、持っていた湯呑茶碗^{ゆのみちやわん}を上り框におくと、

「加江ちゃん、出かけよう」

と車掌^{しゃしょう}の川口加江子にいった。

S交通バス菅多峠線のバスはS県西南部の中心地山北市を出て、鹿野川^{かのがわ}ぞいに三十五分走り、川津橋をわたって菅根淵につく。菅根淵から菅多峠の北坂にかかるのだが、山肌を這^はって九十九折^{つづらおり}に曲折する道が、標高三百四十三メートルの峠の切通しまで、登り九・五キロ、そこから降りになって峠を降りきった落合^{おちあい}の扱店の前まで十二・六キロつづく。勾配^{こうはい}千分の三十五乃至六十五、ところどころに千分の百に近い急勾配が幾カ所もあった。S県では幹線道路の一つで、もちろん県道であったが、道路幅員が二・八メートル、ひろいところでも三・〇メートルしかなかった。

バスは、ガードレールもないその狭い道を、路肩いっぱいには断崖を右に左に見下ろしながら這いのぼり這いくだつていく。S県の県庁所在地S市にあるS交通バスの本社では、日産やいすゞといった自動車製作会社に、

普通全幅二・四五メートルのバス車体の幅^{はば}だけを十センチせまくした全幅二・三五メートルの車体を特別につくらせて、この狭い道を走らせていた。菅根淵から落合まで、バスの所要時間一時間二十分。峠にかかる前と降りきったあとに、ダイヤは十分間ずつ、扱店の前でとまることになっていた。特別に養成された十一人の運転手がこの路線専属になっていたが、急勾配の隘路^{あいろう}になれきっている専属の運転手でも、その峠の前後の十分間ずつの休憩時間で息をついた。

川口加江子はすすけた柱にかけられている細長い鏡の前に、自然に自分をうつす姿勢になって、くせになっているしぐさで自分の服装をただした。四年前、加江子がS交通バスに採用された頃、指導員から「顔——いやみなく」「髪——清潔に」などと暗記させられた乗務員心得の言葉が、発車間際になると今でも加江子に無意識にそのしぐさをさせてしまう。

粗末^{なぐさ}な長椅子^{ながいす}を一つだけおいて、バスの切符売場と乗客待合所^{きやくまちご}にしている扱店の表土間へ窪津と加江子とが出ていくと、砂埃^{すなほこ}りにまみれてぶらさがっている時間表の下や、軒先^{のきさき}に咲きのこっているコスモスの花のそばに立っていた乗客たちが、待ちかねていたようにバスに乗った。

加江子はバスの前後をたしかめた。低い家並が不揃いに五、六軒ならんで、そのむこうに竹藪が風にそよいでいた。竹藪は鹿野川の川ぶちにそっている。そこが淵になっっているのだ。秋の日差しがあたりを照らしている道には人影はなかった。たしかめて、加江子は、「おそろいになりましたら発車いたします」と澄んだきれいな声でいった。

窪津がブザーでこたえて警笛をならすと、バスの前で餌をあさっていたレグホンがあわててコッココツコツときたてて道をさけた。窪津はアクセルをふんだ。

＊

バスの座席はあらしうずまっていた。ほとんどが土地の人たちであつたが、猟銃を手にした二人連れ、明日からはじまる佐土浜の港祭りの観光客とわかる乗客が七、八人まじっていた。バスに観光客とわかる乗客が乗っている場合には、車掌は簡単な観光ガイドの役目もしなければならぬ。

「皆様、皆様のバスは、これより菅多峠にかかります。この菅多峠は、S県立公園となっております。県立公園は峠を降りますと南に優秀景観地帯を誇ります霧岬国定公園につづきまして、山岳美と海岸美とは、長い旅路におつかれの皆様をおなぐさめいたすことと存じます。」

カーブが多うございますが、しばらくの間御辛抱下さいませ。ただいま、この峠の中腹に、総工費三億五千万円を投じまして、トンネルを開鑿中でございます。トンネルは北トンネルと南トンネルの二つにわかれ、北トンネルは全長四百十八メートル、南トンネルは全長二百六十二メートル、取合道路はほぼ四キロ。工事が完成いたしますと、山北、佐土浜間は距離にしまして五・五キロ、時間にしまして四十五分短縮されることになる予定でございます……」

道が檜の深い林にかかる前で、バスがとまった。

「ブレーキのテストをいたします。しばらくお待ち願います」

赤くブレーキテストと書いた標柱がそこに立てられていた。千分の三十五の登り勾配が檜林の中で千分の四十五にかわるのである。

バスが檜の林にはいると、窪津はラジオのスイッチをきった。ラジオは野球放送をながしていたが、それがプツンと音をたてて切れると、エンジンのあえぎがせつなそうに聞えた。ひとかたまりになって乗っている観光客の中から、えんじの派手なセーターを着た青年が、加江子の方に手をあげて、

「ラジオ切るなよ」

となじるようにいった。

「まことに相すみませんが、この峠道八十分の間、安全運転のため、ラジオはきらせていただきます」

加江子がこたえると、赤く髪をそめた若い女が、

「だってヒットが出れば逆転勝ちってところじゃないの」

と大袈裟にいった。

運転手がラジオに注意をうばわれると、運転に危険がともなう。三年前の早春、バスの転落事故があつてから、S交通バスでは、その規則をつくつていたので。

もつともその時転落したバスは、遠いH県から隣県のT県をおつてT市とS市とで二泊をかさねて来た貸切の観光バスであつた。事故は運転手の過労からおこつていた。それに菅多峠の急勾配のことも、隘路のこともその運転手はよく知らなかったのだ。その時、十七人が死んで三十一人が重傷をおつた。あとで、生き残った負傷

観光客たちがラジオにあわせて歌

謡曲を合唱していた時に、その事故がおこつたことがわかつて、その規則をつくるきっかけになった。

観光客たちは、しげくぶつぶつ囁きあっていたが、そのうちバスのそとにやると、そのまま口をつぐんだ。

断崖注意と書いた危険標が、カーブの路肩に立っていた。その危険標にならんで、事故現場、衝突、昭和二七、二、一八と書いた少し小ぶりの黄いろの事故標が立っている。とおりにぬけて来た樫の林が断崖の下に見えていた。

*

窪津は、警笛をならしつづけていた。カーブごとに、警笛鳴らせと書いた指導標識が立てられている。路肩には軟弱地盤の限界点を示す路肩標が、半ば外側に倒れている。かたちに斜めに立ってつづいている。路肩標の頭には、小さな帽子をかぶつたように赤いペンキがぼつとりと塗られていて、その赤いいろのつらなりが、カーブのかたちをそのままに見せていた。

不意にバスが急停車した。トンネル工事に働いてる失業対策労務者をいっぱいのにせた大型トラックが、前部バンパーをバスとつきあわせるほどの距離に急停車していた。

バスはバックをはじめた。幅員二・八メートルの隘路では、普通車体よりはせまくしてあるといつても、バスはレールの上を走る有軌道車よりも正確に車輪を有効幅員の上にのせていかねばならなかった。バックとなると、運転はいっそう困難になる。車掌は下車して、運転

手に見えない車体左側の車輪と路肩との間隔^{かんかく}や路面状況を運転手に知らせなければならなかった。

「左、充分です。オーライです。オーライです……」

それから笛をピーッピッと小さきぎみに区切って吹きつけながら、加江子は、待避所までバスを誘導していく。

こうしたすれちがいのために、この県道には三百メートルごとに待避所がもうけられていた。バンパーをつきあわせてむかいあった車は、待避所に近いもの、カーブが少なくてバックしやすいものが、咄嗟^{とつさ}におたがいの状況を判断して、バックしなければならぬ。しかし、待避所といっても、幅員五・〇メートルしかなかった。道路構造令にさだめられている特殊の場合に特例として許されているぎりぎりの二車線の幅員というわけである。大型トラックは、バスと車体をすれあわせるようにして、ステッパに立った加江子のすぐ眼の前をすれちがっていった。

バスはもう一度同じ道をのぼっていった。スピードは十キロから十二キロ。カーブをまわると、安心したように十七、八キロのスピードが出るのだが、すぐ次のカーブが迫って来る。そこで上りの山北行バスと出あった。崖や檜が山肌をおおっていた。それがいつかまばらに

なり、谷間をへだてて植林された若い杉の林がむこうの山肌にみえた。炭焼^{すすやき}小舎のそばにある待避所でバスは三輪トラックとオートバイをさけて杉の林にはいつていった。尾根を一つわたったのだ。ところどころにバスのりばと書いた標柱が立っていた。乗る客も降りる客もないのりばだが、それは一キロごとに立てられて、檜林第一とか一本楠とかと一つ一つ名称がつけられて、バスの運行の基準標にも運賃の区間標にもなっている。杉の植林を出はずれたところで、バスはもう一度、失業対策労務者をのせた大型トラックと行きちがった。今度は、トラックがバックしてバスをさけた。

道がその尾根^{おね}をまがると、眼の前の山肌に新しいトンネルの入口が見えた。水で洗ったばかりのような石積^{いしづみ}擁壁^{ようへき}のモザイクを外郭^{がくかく}にして、その中にコンクリートの直線と黒いアーチの曲線とが美事な幾何^{きこ}模様^{もよう}をえがいていた。擁壁^{ようへき}の上部には安全第一、株式会社斎藤組と一字一字大きく書かれた文字板がならんでいた。

県道から、そのトンネル入口まで五・五メートル幅員の取合道路がすでに完成して三百メートルほどつづいていた。ガードレールまでとりつけられたその新しい道には、存分に小砂利がまかれていて、バスが山肌をのぼっていくと、その小砂利にのこっているトラックのわだち

がかすかに見わけられた。やがて、眼の下に、トンネル入口の前にある広場と、そこにトタン屋根を並べている工事事務所や飯場が見えた。

県道は、その取合道路と分れたところから千分の五十から六十五の勾配になって、山肌を曲りくねりはじめる。ガードレールをとりつけられた取合道路が、バスがカーブを曲るたびに右になり左になって次第に谷間に遠ざかっていった。椎や檜の木立ちも杉の植林も、そのあたりで姿を消し、やがて、うつぎや雁皮、すげや根笹の茂みが山肌をおおいはじめた。

屈曲多し、狹隘注意の危険がつづき、黄いろい事故標が、きまって二、三本ずつかたまって、路肩にたっている。道はまた大きく曲りながら、遠い尾根へあたりはじめた。断崖注意。落石注意。降雨時滑る。赤いペンキをぬった路肩標がまた路肩につづきはじめていた。

*

加江子は、その時、遠い山肌の、うつぎの茂みの間をトヨペットが見えかくれしてくだつて来るのに気づいた。菅多峠の北坂をのぼりつめたところから、百メートルほどくだったあたりであった。その坂上のカーブには北坂上という区間標がたてられていた。

「前方トヨペット一台、北坂上カーブ下百メートル付

近」

加江子はブザーをおして、窪津にしらせる。

「スピード早いです」

「はい、前方トヨペット一台、北坂上カーブ下百メートル、スピード早い……」

窪津がすぐブザーでこたえて、加江子の言葉をくりかえした。

窪津はトヨペットが北坂上のカーブを曲った時から、すでに気づいていた。黒い車体の最新型のトヨペットクラウンである。そして、そのトヨペットクラウンが佐土浜市の栗林病院の院長の乗用車であることも、降り坂を三十五キロを越すスピードで走りおりて来ていることも、トヨペットに気づいたと同時に窪津は気づいていた。

菅多峠北坂の降りでは、バスは三十キロどころか二十五キロのスピードを出すのさえせいっぱいであった。乗用車でも三十五キロのスピードでは危険であった。四十キロではかならず事故をおこす。栗林病院の院長は、事故をおこさないぎりぎりのスピードで菅多峠をくだることを町の人に得意にしていたのだ。

窪津はトヨペットに気づくと、すぐ、トヨペットのスピードと、トヨペットまでの距離とを心の中で計算し

た。北坂上のカーブまでに大きなカーブが二つある。もう三十年近く、この菅多峠を走りつづけて来ている窪津には、道ばたの一本の木も一つの岩も、親しい友だちのようになっている。眼をつむっていてもその位置がわかった。窪津は、前方トヨペット一台……と加江子の言葉をくりかえしながら、アクセルをふんだ。

手前のカーブをまわったところにある待避所でトヨペットをさけることに、窪津の心の中の計算はすでに答を出していた。スピードメーターの針が十八キロのところまでゆれていた。この屈曲の多い登り勾配では、バスには限界のスピードであった。バスがその待避所にとまると同時に、眼の前の小さなカーブのかけからトヨペットが走り出て来て、バスの車体をかすめる早さで走りすぎていった。

北坂上のカーブは標高三百二十メートル、峠の切通しまで、まだあと少し登りが残っていたが、ここが菅多峠でもっとも危険な難所とされているところであった。その上、十月半ばに幾度もつづいておそって来た台風のために、路肩がくずれ落ちていた。樫丸太や杉丸太で応急に補修されていたが、四日前にスピードを出しすぎていたオートバイが一台、転落事故をおこしていて、加江子たちは事故注意の営業所長訓示をうけたばかりであっ

た。加江子は、ドアをあけてステップに立った。断崖の深さは、七、八十メートルあった。晩秋の冷たい山風がその深い谷間から吹きあげて来た。

加江子がS交通バスに採用されたばかりの頃、隘路誘導の実習にS市近い相良浜の海岸路線でステップに立たされた時は、眼の下さかの崖下がけしたに打ちよせている波を見て、眼がくらみそうになった。その時は指導員が加江子の左の腕を痛いほどきつく掴んでくれていたのだが、膝ひざががくがくふるえて来て、運転手につたえなければならぬ声が咽喉のどから出なかった。しかし、その相良浜の断崖だんがいの高さは、せいぜい三十メートルほどしかなかったのだ。

「左、あと、五センチです」

「左、あと、わずかです」

樫や杉の丸太で補修された路肩いっばいに、左の車輪はカーブを曲っていた。今のぼって来たばかりの道が、なげすてられた黄いろいベルトのように山肌をはってうねり、遠いはるかな谷間に、トンネルの取合道路がわずかにみえていた。新しいガードレールをつけたその道は道路の小さい雛型ひながたのように見えた。

*

断崖をとおりすぎて、加江子はドアをしめた。そこで勾配は千分の三十に落ち、道路幅員もこの峠では広い

三・〇メートルになって切通しまでつづく。そこからは、後方に鹿野川の河口が遠く見はるかせた。赤野浜とよばれるその砂浜の松原の上に、おそい午後の日差しが、なめにさしているのが見えた。加江子はガイドの役目にかえった。

「皆様、曲りくねって随分と登ってまいりました。後方、遠く見えます砂浜が県立公園赤野浜でございます。一幅の絵を見るように遠くはるかにつづきます濃い緑の一線が、県下三松原の一つ、遠く平安朝の古から京の都にもその名を知られておりました赤野の松原でございます」

喋りながら、その時、加江子は、ふと、うしろの隅の座席に腰かけている女の人の眼がとまった。その人はよく似あっている藤いろのツーピースを着ていた。そして、膝に大事そうにスニーカーを抱き、じっと窓外を覗き、こ。こ。こ。と見た時、加江子だけに見える、は感じのする、その人の美しい横顔を、涙がきらりと光ってこぼれおちていった。

2

その人は、山北市の父通バスの営業所前から、S市から乗りついで来た連絡乗車券で、加江子のバスに乗っ

た。その乗車券にパンチをいれた時、加江子は、その人も七、八人づれの観光客の一人だと思っていた。だが、発車してみると、その人は、一人だけはなれて、バスのうしろの隅の座席に腰かけていた。

佐土浜市の営業所前まで、ちょうど三時間かかる菅多峠の路線は、S交通バスでは遠距離路線に指定されている。車掌は、乗客のサービスにもいろいろ心を配らねばならなかった。発車してすぐ、加江子は、乗客の手荷物の整理をはじめた。前の方の座席からはじめて、加江子はその人のところまでいってみると、その人はスニーカーを膝に抱いていた。霧岬国定公園をたずねて来る一日二日の観光客としては、少し大きすぎると思われるスニーカーであった。

「お荷物、網棚におのせしましょう」

加江子が声をかけると、その時、その人は、

「網棚には無理なの」

とこたえた。

「前に荷物をおあずかりするところがございます……」

バスには、運転台の左に、網棚にのらない大きな荷物をあずかるところがつくられている。そういいながら、

加江子が手を差し出すと、今度は、その人は、

「よろしいんです、このままで」

と拒むかたい言葉でこたえ、大事なものでまもるように、膝の上のスーツケースをかかえなおしたのだが、そのまま、それを、ずっと膝の上にかかえつづけていたのだ。

国定公園に指定されてから、年々観光客が多くなっている霧岬には、時たま、女ひとりの観光客があった。そんな人たちは、加江子たちとすぐ親しくなった。翌日、たまたま公休の日にあたっていたりすると、加江子たちもいっしょに霧岬へいくことがあった。

霧岬には、バス道路からはずれて、土地の人たちもあり行かない景勝の海岸がいたところにある。美しい貝殻にうずもれた小貝浜とか、椿や水仙や、はまゆうや岩百合などの咲く魚見崎とか、また造礁サンゴが赤、白、桃、緑、黄などさまざまにいりまじってみえる千尋崎とか、そんなところに案内すると、そうした人たちは加江子たちがおどろくほど喜んだ。

しかし、加江子には、スーツケースを持ったその人は、そうした観光客とも思えなかった。その人の美しい頬に、涙がきらりと光ってこぼれおちた時、加江子は、何故となくはっとした。加江子は、ガイドの説明をやめて、何気ないふうに、その人の横顔をしばらく見ていた。さびしそうな感じが、そのととのった美しい横顔に

ただよっている。土地の人たちにとっては色白な横顔であった。しかし、その色の白さは、冬の日かげの水仙の花のような力のない白さに見えた。

県道がゆるやかにカーブを描いて、赤野浜は尾根にかくれた。その時、加江子の視線を感じでもしたように、その人が加江子を見た。視線があうと、美しいその頬に、涙のあとなど感じられない軽い笑いがちらとうかんだ。横顔に見たさびしそうな感じは、その顔にはまるでなかった。涙がこぼれおちたと見えたことが、自分の眼の間違いであったように加江子に思えた。はぐらかされた感じが、加江子をとらえた。

*

バスが切通しにとまった。

ブレーキテストと赤く書いた標柱が、そこにも立っていた。長い急勾配の坂道では、ブレーキが焼けてきかなくなることもある。加江子は自分の仕事にかえった。

「ブレーキのテストをいたします。しばらくお待ち願います」

切通しから、谷間をへだてて、深い森におおわれた山のつながりが見えた。菅多峠の三角点が左手の根笠の茂みの高みに見え、その三角点から、尾根が三方に分れて、ひとつの尾根は、北坂上のカーブへ、ひとつの尾根